



パネルディスカッション



ロータリーにおける奉仕

コーディネーター

中島治一郎 PG
(泉大津RC)

パネラー

秋山 一 PG
(東京調布RC)

深川 純一 PG
(伊丹RC)

渡辺 好政 PG
(児島RC)



坂田(司会) ディスカッションを開催いたします。テーマは、『ロータリーにおける奉仕』でございます。コーディネーターならびに、パネラーお三方のご紹介を佐々木ガバナー、お願いいたします。

佐々木G ご紹介を申しあげます。本日のディスカッションのコーディネーターをお願いしております中島治一郎先生は、泉大津ロータリークラブに1961年ご入会。それから83年に会長。1986-87年に地区のガバナー。それからこれが一番大事な事でございますが、1988年から90年までの国際協議会のディスカッション・リーダーでダラスで私どもが一番しぼられた先生が中島パストガバナーでございます。現在は、1996-97年国際ロータリーのポリオ・プラス・パートナーズ委員会の副委員長、また、現在、RIの会長諮問委員会の委員、ポリオ・プラスの広報部のメンバーでございます。

続きまして、パネラーの秋山一パストガバナー。東京調布ロータリークラブのメンバーでございまして、職歴といたしまして、日本経済新聞に入社されまして、1961年12月に秋山ビルディング株式会社を設立され、代表取締役役に就任されて、現在に及んでおられます。ロータリー歴といたしましては、1968年に東京調布ロータリークラブ入会。1976-77年に同クラブの会長。それから1990-91年の第2750地区のガバナー。91年から93年までバギオ基金の会長。それから96年には「ロータリーの友」の委員長でございます。現在は特別顧問としてご活躍でございます。

続きまして、深川純一パストガバナー。伊丹ロータリークラブに所属されております。学校法人 大阪学園理事長、また、伊丹市の公平委員長、伊丹市建築審査会委員の公職をご歴任されております。1973年に伊丹ロータリークラブに入会されまして、1990-91年度第268地区、現在の2680地区のガバナーを務められました。1992年1月に国際ロータリーの規定審議会の代議員。1996-97年度国際ロータリー新会員教育実行グループ、第3ゾーン・コーディネーターをお務めでございます。現在、97年から98年にかけて国際ロータリー会員教育グループ、第3ゾーン・コーディネーター等をご歴任されております。秋山パストガバナーと深川パストガバナーは、私の最初のときのガバナーの同期でございまして、お互いに中島先生にしぼられた身でございます。

最後でございますが、渡辺好政パストガバナー。児島ロータリークラブの所属でございまして、ただ今では、眼科の日本斜視学会の常務理事であり、斜視学の世界的な大家として、有名な方でございます。岡山大学の医学部の客員教授をされておられますし、それから、ロータリー歴といたしましては、1993-94年に2690地区のガバナーをされまして、96-97年度には国際ロータリーのローターアクト委員等を務められました。そして、今年のアナハイムにおきます国際協議会の私どもの先生でございまして、皆さん方に私はしぼられてまいった口でございます。

只今ご紹介申し上げましたように、非常にロータリーに精通された方々でございます。皆様方、本日のパネルディスカッションを是非期待していただきたいと思っております。ご紹介を終わります。

坂田 それではこの後、司会進行、まとめ役を兼ねまして、中島治一郎様どうかよろしく願いいたします。

中島PG 皆様こんにちは。今、佐々木ガバナーからご丁寧なご紹介をいただきました中島でございます。最初にちょっとお断りをいたしますが、私は決して国際協議会で、佐々木ガバナーはじめ、今日のパネリストのお二方をしぼった覚えはございません。非常に優しい先生だったというふうに思いますので、誤解がございませんようお願い申し上げます。佐々木ガバナーから今度のこの2670地区の地区大会でパネルディスカッションをコーディネートしてほしいと頼まれました。題材は、「ロータリーにおける奉仕」について語り合っしてほしいということでございました。パネリストの三人の方は、佐々木ガバナーが日本全国から、色々選択なさいまして、お頼みなされたパネリストでございまして、ロータリーに関します知識、そして論客として日本全国に響いたお三人でございます。与えられた時間が80分でございます。ちょっと早めに前のプログラムが終わりましたから、5分程長くやらせていただきますが、一人で80分ぐらいは、おしゃべりになる方ばかりですので、私、コーディネーターとしては非常に楽でもあり、時間の調節に困るんじゃないかなと思うわけでございます。皆さん方の地区のパストガバナーの先生方の中に、あらゆるロータリーの事につきまして深い見識を持っておられ、そして非常に雄弁な方もたくさんおられるのでございますけれども、そういう先生方からは皆さん方、お話を伺う機会が多うございますから、佐々木ガバナーは他地区から、論客をお集めになりまして、普段聞けないような話を皆さん方にお聞きいただきたいという思いから、こういう企画をなさったと私は理解しております。

ロータリーにおける奉仕にはいろんな見方がありますし、いろんな考え方があると思います。それはそれで私はいいいと思います。唯一というものはないと思います。しかし今日三人の方々から、ロータリーの奉仕につきまして、いろんな角度から、お三人が今までに培われました知識をご披露なさいます事から、いろんな事を学んでいただければ、非常に幸いだと思っております。

他地区のパストガバナーの先生方の中でこのフロアにおられる方の中にもこの奉仕につきまして深い知識をお持ちの方がおられますので、時間がございましたら私の方からお願いいたしまして、ご意見を伺いたいと思っております。パストガバナーの先生方、いつあたるか判りませんので一つご謹聴していただきたいと思っております。そして、この2670地区のロータリアンの皆さん方でも何回かここでご披露されましたご意見の中で、ご疑問等々が出てまいりましたら、後でまたご遠慮なく、また、そういう時間も設けますので、お手をおあげいただきまして、ご質問いただきたいと思っております。

「ロータリーの奉仕」でございますが、ポール・ハリスが1905年にロータリーを作り出したときには、奉仕という概念はあまりそこには存在しなかったと思うのであります。奉仕の概念、考え方がどういうふうになるにロータリーに持ち込まれて、どういうふうに進化していったか、こういう歴史

について、まず、深川パストガバナーからお伺いをいたしたいと思います。

深川パストガバナーのロータリーの歴史に関しますお話は非常にすばらしいものでございまして、私、時々そういう機会に恵まれますけど、今日は1905年から1998年までやっていただきますと時間がありませんので、1930年の手前ぐらいで終わっていただくようお願いしています。1929年にアメリカ初の大恐慌がございました。そして1930年代はアメリカも暗澹たる経済状況でございまして、今の日本のようでございます。そういった時にアメリカのロータリアンが非常に活躍されました。そのあたりのくだりは是非一つやっていただきたいなと思います。それじゃあ、深川先生からこのロータリーに奉仕という概念が導かれた経緯をお話いただきたいと思います。よろしくどうぞ。

深川PG 深川でございます。ロータリーの発祥の物語は皆さん方もよくご存知だと思いますので、簡単に振り返ってみたいと思います。

今から93年前の1905年の2月23日、ポール・ハリスが3人の友達とシカゴのノースディアボン街のユニティ・ビルの711号室で「一つの職種から一人だけ会員を選んで、お互いに心を開き合って助け合っていく楽しいクラブを作ろうじゃないか」と言って話しあいました。これが後に至って、ロータリーという巨大な組織に発展していくそもそもの濫觴の物語であります。その時にどういう事を考えていたのかと言いますと、皆、零細業者ばかりであります。そこで、このシカゴの厳しい経済情勢の中でお互いに肩を寄せ合って、いろんなアイデアを交換し、そしてお互いに助け合って、自分たちが隆々と栄えていくようなクラブを作っていくために、まず、お互いの会員同士の取り引きを義務づけました。一業一会員制でありますからいろんな職種の人があります。従って「オルガンが欲しくなったら地域のオルガン業者から買ってはならないよ、アルバート・ホワイトから買ってやれよ」、「石炭が欲しくなったら、初代会長シルベスター・シールから買ってやれよ」。そういう形で会員同士の取り引きを義務づけました。それから地域の人から、例えば「弁護士の良い人を知らないか」といったらポール・ハリスを紹介するとか、「洋服屋のいいのを知らないか」と聞かれたらハイラム・ショーレーを紹介する。

このようにいたしまして、お互いの仕事を地域社会にPRしていききました。やがて、自分たちの職業上の悩みをクラブに持ち寄って相談するようになりました。業界が違いますから、ある会員が「俺の会社で今、こんな事で困ってるんだ」と言ったら他の会員が「あゝそんな事なら俺の業界ではもう解決済みだ。こうしてごらん」と言って教えてくれる。そのようにいたしましていろんなアイデアの交換を始めました。あたかも、ロータリークラブが経営相談所のような機能を持つようになったのであります。この事は重要な事でございます、シカゴロータリークラブの綱領の中に「Exchange of Idea 発想の交換」ということが定められていたのであります。そして、このアイデアの交換の機能というものが、やがて22年後の1927年になりまして、職業奉仕という類まれなる概念を生み出す元になる

のであります。

しかし、この時点では、奉仕とか、世のため人のためのことは全く考えておりません。すべて自分達だけが隆々と栄えていくクラブ、お互いに知恵を出し合って、助け合って栄えていくクラブ。まさにこの原始ロータリーというのは、エゴイズムの出発点だったのであります。先程、中島先生がちょっと触れられましたが、初めから奉仕なんて事は考えておりませんでした。では、これがどのようにして世のため人のための事を考えるクラブになったのか、という事でありまして。

一年余り経って1906年の春頃、フレデリック・トゥイードと言う人が、ドナルド・カーターという特許専門の弁護士に、「シカゴのクラブに入ると皆豊かになって楽しくっていいよ、おまえも入らないか」と誘いました。カーターは、助け合いの話聞いておりまして、「君たちは確かにお互い助け合って、皆隆々と栄えている。それは結構だろうよ。しかし、一業一会員制でしょう。ではクラブに入れなかった同業者はどうなるのか。それから職業をもっていない一般の地域社会の人たちはどうなるのか。私たちはこの地域社会に生を享けて、地域社会でお世話になって、そして今生かされている。その恩になっている地域社会に対して、何等の足跡も残さない、何の恩返しもしないで、自分たちだけが隆々と栄えてこの世を去っていく。俺はそのような寂しい生き方をしたくないよ」と言って断固として断ったのであります。

その話を聞きまして、痛く反省したのがポール・ハリスだったのであります。「カーターの言うとおりのだ。クラブの行き方を変えよう」と。それからポール・ハリスはシカゴクラブの行き方を変えさせました。クラブの綱領も「シカゴ市の利益を推進し、シカゴの市民に市民としての誇りと忠誠の念を植え付ける事」という、ある種の対社会的な意義を持った規定を第3条としてつけ加えたのであります。それまでは、シカゴクラブの綱領というのは親睦、そしてその内容であるお互いの助け合い、その二つでございました。第3条を付け加えた事によってドナルド・カーターも喜んで、シカゴのクラブに入会しました。

そして、ポールと一緒に世のため人のための事を説いたのであります。シカゴのクラブの連中は、依然として親睦一辺倒だったのであります。やがてクラブが親睦派と奉仕派に割れていくのであります。この辺の詳細は割愛させていただきます。

そして一生懸命ポール・ハリス達が、世のため人のための事を説いているところへ、先程RI会長代理の丸山先生がちょっと紹介なさいましたが、1908年、アーサー・フレデリック・シェルドンという経営哲学者、ロータリーの哲人と言われている人物（ミシガン大学で経営学を専攻）が入会してきました。そして、ポール・ハリス達が説いている、「世のため人のため」という事をサービスという言葉で集約したのであります。これがロータリーの世界にサービスという言葉が入ってきた最初だったのであります。

ところが、サービスといっても、初めての事で、どのような事をすれば

サービスになるのかよくわからない。そこで最も素朴な考え方の人達は、この世の中の歪みに落ちこちて救済を求めている人に救済の手を差し伸べる、即ち弱者救済をすれば、これが世のため人のためになるんだらうと考えました。そこで、例えば宣教活動をやっている牧師が、馬が死んでしまって動けなくなっている。それをシカゴのクラブの連中が聞きまして、皆でお金を集めて馬を買い与える。いわゆる金銭的な団体奉仕ですね。そういう事もやっておったのであります。いろんな金銭的、即物的な奉仕、要するに弱者救済をもってロータリーのサービスだと考える人達がまず一方に居りました。

しかし、やがて反省が出てまいりまして、金を出す事だけが一体奉仕なのか、サービスなのかという疑問が出てまいりました。それから、弱者救済というのは、本来は行政の仕事ではないのか、ロータリーはサービスという美しい名の下に、行政の仕事の下請けをするのか、という意見も出てきました。弱者救済は本来行政が為すべき事、それからロータリアンでなくてもできることではないか、ロータリーでなければできない奉仕があるはずだ、一体それは何か。我々は職業人だから職業を通じて世のため人のために働くべきだと考えました。今朝ほど、会長代理の丸山先生が職業奉仕を通じて人々に幸せを与えるんだという事をおっしゃっていました。まさにそのとおりで、その視点からロータリーの方針を考えようではないか、という考え方が一方に出てまいります。これは優れて精神的な奉仕をロータリーの奉仕と考えるものであります。

イギリスでは、ロータリーというのは魂のあり方の問題だと言われるくらいでありまして、それと同じ考え方であります。その人達はまず、ロータリアンを育てておけば、一步クラブの外に出たら、ロータリアンが職業社会でも、地域社会でも、国際社会でも、千差万別の社会的状況に応じて、社会万般の人に影響を与えていくだろうと。これがロータリーでなければできない奉仕ではないかという考え方であります。言わば、ロータリーを倫理運動として捉えるわけであります。ロータリー運動と申しますものは、これは職業人の倫理運動だという結論がその立場から出てまいります。

ある学者が言っておりますが、ロータリー運動というものは、人類文化史がこの20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動だ、と言い切っております。そんな事が一体どこに書いてあるのかというと、「標準ロータリークラブ定款」第3条の綱領を見てくださいと一目瞭然に了解できるだろうと思うのであります。この立場をもう少し解説しておきますが、倫理運動と言っても抽象的な表現でありますから、具体的な例を一つ取り上げてみます。

RI会長代理の丸山先生が、煙草の吸い殻が落ちて散乱しておいて戦後の教育がなっていない、公德心が全くなっていないというお話をなさっておられました。煙草の吸い殻が町中に落ちていて、それをロータリアンとしては避けて通る事はできませんから、それを拾います。これはささやかではございますが、社会奉仕の範疇で捉える事ができるだろうと思うので

あります。それから、拾った吸い殻を入れる灰皿をお金を出して寄付する。この事もやはり社会奉仕の範疇でとらえることができます。しかし、ロータリーの奉仕の本願はそこにはないのであります。何故かといいますと、煙草の吸い殻を拾ったり、灰皿を寄付することは、ロータリアンでなくともできるのであります。ロータリーは、いつも抜本的な事を考えます。それは何かといいますと、そもそも煙草の吸い殻を捨てない人を育てる。そこにロータリーの奉仕の眼目があるわけであります。捨てない人を育てたら、吸い殻を拾うこともありません。

ここの所を捉えまして、ロータリーは育てる奉仕、「人を育てる奉仕」だと言っております。そこで、人を育てる前にまず、ロータリアン自身を育てなければならない。そうでなければ、ロータリアンが地域社会の人や職業社会の人を育てる事ができないわけでありますから、まずロータリアン自身が毎週一回の例会で心を磨く、奉仕の心を育てていく、ここにロータリー奉仕の本体があるのだというのが、精神的奉仕を説く人達の主張であります。で、この点を捉えまして、ロータリーは倫理運動だと言われるようになっているわけでございます。この点が、ライオンズクラブの社会奉仕とロータリーの社会奉仕との大きな違いであります。

ロータリーは、あくまでも倫理を提唱します。従って、一業一会員制によって選ばれたロータリアン、自分だけが選ばれた事によって他の同業者がロータリーの功德を受けることができない。そして自分だけが幸せになるのであれば、これは世のため人のためにはなりません。従ってロータリークラブに入って、成功したら、その企業経営のノウハウを同業者と広く共有することが大切であります。

職業人として成すべき事、成すべからざる事をお互いに誓い合う、いわゆる職業倫理訓を同業者なり地域の業界に提唱していく。そして、同業者も、すべての経営者も、そしてすべての地域社会の人たちも、お互いに共存共栄で栄えていく。これこそがロータリーにして初めてできる奉仕ではないかと考えて精神的な奉仕を主張するわけであります。

ところが、もう一つ考え方がありまして、Service above self という、今のロータリーの第一の標語がありますが、その10年程前に1911年のオレゴン州のポートランドの全米ロータリークラブ連合会の大会で、採択されました Service Not self という標語があります。これは Service Not self、self を not、否定しますから、自分を犠牲にする自己犠牲の奉仕、即ち自分を犠牲にしてこの宇宙を支配する神の秩序体系のもとに帰依せよ、これがサービスだという考え方。これは優れて中世キリスト教神学思想以外の何物でもない、非常に宗教的な標語であります。したがってロータリーの奉仕を宗教的な面でもとらえる考え方もまた一方にありました。

しかし、ポールハリスはこの考え方をとっておりません。ロータリーはお寺じゃないのだから、そんな宗教的なことを言ってもっては困るという。そこで Service above self、self の above、上に奉仕を考えよう。self を not で否定するのではなくて、自分はいくまでも温存して、そして自分の

上、これが「超我の奉仕」と訳されておるようではありますが、そういう考え方も出てまいりました。したがって、サービスという言葉についても、いろんな考え方があったようであります。ロータリーは、そのいろんな考え方があっても、自分と異なる考え方を排斥しない、お互いに自分と異なる考え方を尊重しながら、そこから己の足らざるを学び取ろうというのがロータリーの基本的なあり方です。

そのようないろんな考え方が出てきたのでありますが、特に申し上げておきたいのは、いちばん最初の即物的な、金銭的な奉仕を主張する考え方と、さきほど割合詳しく申し上げましたが、倫理運動の立場、精神的な奉仕をロータリーの奉仕と考える立場との間に葛藤が出てまいりました。どうしたことかと言いますと、1910年頃、その当時、全米に澎湃として起こっておりました「身体障害者養護学校設立の運動」というのがありました。これは身体障害者は、身体に障害があるばかりに教育を受けることができない、学校が受け入れないのであります。で、アメリカ連邦憲法には、教育の機会均等が謳われているにもかかわらず、身体に障害があるばかりに学校に行けない。これは由々しきことだから、その身体障害者の養護学校を設立して、教育を受ける権利を保障しようという運動であります。

これはロータリー以前に、全米に民間の善意の運動として澎湃として起こっておったのであります。その運動に、1911年ぐらいからニューヨーク州のシラキューズのロータリークラブが、まず最初にのっかっていきました。それからオハイオ州のトレードのロータリークラブ、それからオハイオ州のエリリオのロータリークラブ、そのようにして、一部行動的なロータリアンが身体障害者養護学校設立の運動にのっかっていったのであります。

その中で一頭地優れておったのが、エリリアのロータリークラブのエドガー・アレンという人です。大変子供好きで、子供からも親しまれておりましたので、あだ名をダディ、おとっちゃんというのであります。ダディ・アレン。彼は、この種の運動をただ善意でやっても、エネルギーが多いだろうと考えました。そこで、学校の土地はどのようにして取得したらいいのか、特殊な学校でありますから、その構造はどうしたらいいのか。それから専門の先生はどこから雇い入れたらいいのか、そのようないろんなノウハウを、一身にプールしておく協会を作っておけばみんながそこへ問い合わせたらいいだろうというので「全米身体障害者養護協会」というものを1917年に作りまして、初代の理事長に就任したのであります。

一躍ロータリアンがその運動のトップに立ったのであります。ところが、さあ、これからは問題でありまして、先ほどの精神的な奉仕を説く人たちが、エドガー・アレンのやってることを非難、攻撃したのであります。エドガー・アレンとしたら、自分がこれだけいいことしているのに何故非難、攻撃されるのか、よく判らないのであります。理論武装がありませんから反論することができない。叩かれっぱなしになっておったのであります。

すが、5年後の1922年になりまして、ポール・ハリスに助けを求めて手紙を書きました。「私はこの全米身体障害者養護学校設立の運動に身を投じて、世のため人のために尽くしているのに一派のロータリアンたちは私を非難、攻撃します。あなたはロータリーの創始者として、あなたなら私を救ってくれると思ってこの手紙を書きました。」という内容でありました。

ポール・ハリスからこれに対しまして返信が来ました。それは3点から成っています。「まず第一点、あなたがなさっておる奉仕の実践がロータリー的に間違っているとは思いません。第二点、さりとてあなたを攻撃する方の言い分も間違っているとは思いません。そして第三点、両者の立場にはこれを調和する原理があるはずだから、次の年度の国際大会にそれにかけて、解決をいたしましょう」という返事でありました。

そしてその次の年度の国際大会が1923年、セントルイスの国際大会でありまして、そこで提案されたのが、ダディ・アレンの考えておるような奉仕もロータリーの正当な奉仕として認めようという提案。1923年の34号決議案だったわけでありまして。

これはもの凄く大激論になりまして、ロータリー分裂の危機があったのであります。ダディ・アレンのいう奉仕などは絶対に認められないという主張がある反面、ダディ・アレンの方もここまで来ると引込んでおれませんか、こんなに世の中のため人のためになっているのに何故これがロータリーの奉仕ではないのかと反論します。侃々諤々の議論になりまして、遂に「もうわかった、それじゃあもうここで別れよう、お前はお前のロータリーをやれ、俺は俺のロータリーをやる」となったときに、二人の人物が立ち上がりました。「両面しばしお待ちあれ、お前はお前のロータリー、俺は俺のロータリー、それはロータリーではないではないか、ロータリーというのはいろんな考え方がある。お互いに違う考え方から学び合うのがロータリーではないか、それが自分の意見と違うばかりに相手を排斥してしまってロータリーを止めようなどともない話だ。ここはひとつ俺達に任せてくれ」と言って二人の人物が代案を書いたのであります。

二人の人物というのはひとり、ナッシュビルロータリークラブのウィル・アール・メイニア・ジュニアであります。この人はこのときの功績を讃えられて1936年に国際ロータリーの会長になっております。もう一人は1924年のシカゴのロータリークラブの会長でありましたウィリアム・ウェストバーグであります。その二人が書き上げた代案が今日残っている決議23の34号であります。

この二人は、この代案を書くときに二つのことを考えておりました。一つは、初期ロータリーにおける様々な思想上の葛藤を国際大会の決議をもって一気に解決しておこう、これが第1点。それから、ダディ・アレンの考えておるような、団体的な金銭的な社会奉仕、こういうものも無条件では認めることはできないが、色々な条件を付けた上で、これもロータリーの正式な奉仕として認めよう、これが第2点。従って、これは、初期ロータリーの思想体系を整理した最小にして最後のドキュメントなのであります。

素晴らしい文章でありまして、ロータリーの「般若心経」とも言われております。「手続要覧」を読む暇のない人も、この決議第24の34号を熟読玩味すれば、自ずからロータリーが明らかになるだろうと言われております。

一応1923年まで、1927年のことは先程職業奉仕で触れましたので、この辺で私の話を終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

中島PG 深川パストガバナーありがとうございました。私もつい聞き惚れまして、ちょっと時間超過気味でございました。1922年のところで私あと3分でお願いますと申しあげました。1923年の決議23の34をもう少し深川パストガバナーのお考えをご披露いただきたかったんでございますけれども、これは次の弁士秋山パストガバナーにお願いをすることにいたしましたのであります。

今、深川パストガバナーのお話で、ロータリーに奉仕という考え方が導入されていった歴史的な過程をお聞きいただきました。その中でいろいろなディスカッションが行われたわけでございます。そういった経緯の中で、皆さん方、奉仕に関しまして、はじめよりは少しお考えがクリアーになったんじゃないかというふうに思うのであります。

ここで秋山パストガバナーに決議23の34、そしてその中に含まれました、先ほど深川パストガバナーもちょっとお触れになりました、「人を作る」というロータリーの運動につきまして、もう少し詳しくお話を賜りたいと思います。

それじゃ秋山パストガバナー、お願いします。

秋山PG 秋山でございます。私自身不勉強でございまして、なかなか理論的に話ではできませんが、私なりにロータリーについて考えていることをお話しさせて戴きたいと思います。

今、深川パネラーよりロータリーの発足からの歴史をお話しいただきまして、非常に私も感激しながら聞いておりました。というのは、ロータリーが発足した1905年から12年までは、わずか7年であります。その間、シカゴクラブでは発足以来の親睦と職業を通じての互惠運動という殻を破って「奉仕」という概念を入れて大きく脱皮し、1912年にはその宣言をしています。このエネルギーと情熱に感心致します。決してすんなりいった訳ではありません。皆で真剣に討議され語り合った結果だと思ひまして、その当時の方々の真摯で前向きな姿勢に心を打たれるのであります。さすが創業者だけのことはあるなあと思うのであります。

歴史を正しく学ぶということは単なる昔の追想ではございません。歴史を知るということは、すなわち現在を正しく知ることであります。個々のロータリアンが相手の身になって考える思いやりの心を持ち、他人の悲しみを自らの悲しみとし、他人の喜びを自らの喜びとして感じることの出来る、本当に人間らしい温かい心をもったロータリアンが現在をしっかりと見据え、そこに問題点を見つけ、ロータリアンの心の琴線に触れた時に、そこに一つの大きな夢が生まれるのであります。例えばポリオのない世界を創りたい、戦争のない平和な世界を創りたい、平和を妨げるものの根源

は貧困であり、その貧困の根源になっている文字を知らない人たちを無くしたい、そういう夢が生じるのであります。これらの夢こそが我々を行動に導くものなのであります。

先ほどの深川さんの話に出てきました1910年頃から1922年迄のロータリーを二分するが如き、行動派と理論派の二つの大論争をみごとにまとめ上げロータリーの危機を救った決議23の34というものは、今迄の多くの奉仕に対する考え方の論争に終止符を打つことにもなり、将来への発展の基礎になったものと思います。ガイ・ガンディガーの「通解」にありますような、実に純粋なロータリー精神もこれに生かされていると思うのであります。また多数派も少数派の意見に十分に耳を傾け、手を携えて建設的な妥結を求める、ロータリーならではの寛容の精神、お互いの主張に耳を傾け、そして相手の立場に立ってものを考えようという、この決議23の34というものはまさにその内容ばかりでなく、これを導き出した手法というものもまた、今後のロータリーにおいて学ばなければならないものではないでしょうか。

ところで、23の34というのは、1923年の大会に提出された34番目の議案ということでございますが、1923という数字に何か心当たりを感じられる方がおられるでしょうか。1995年は神戸の方々にとってはほんとに忘れることのできない年号であります。私ども関東の者にとってはほんとうに忘れることのできない年号であります。私ども関東の者にとっては、1923年という年は忘れられない年、関東大震災の年であります。もっとも私は、二歳でございましたから、実感はないのであります。常に話を聞いたものでございます。天窓からザーとおちてくるあの瓦の音は、本当に忘れられないと母親が常に言っておりました。

この23年、できたての、できて3年目の東京ロータリークラブは破滅の状態になってしまったのであります。この破滅の状態の時に、これは9月1日でありますけれども、なんとすぐ行動を起こしたのがRIでございまして、大阪を通じて莫大なる義援金と、そして、アメリカの太平洋艦隊まで動員しての物資の輸送をしてもらった。これは東京のロータリアンばかりでなく日本のロータリアンにとってロータリーというものが如何に国境を越えた友情に厚く、また温かい思いやりの心を持ち、実践力を持った団体なのか、ということを認識しました。この驚きと感激は大変なものであったと思います。そして、それまで月に一回か二回ぐらいの会合であったロータリーを、彼らは本当に勉強する気になったのであります。

幸いにも先ほど申しあげましたように、この1923年というのはロータリーが精神的にも、実践の点においても、また情熱においても非常に優れた時期でございまして、この素晴らしいロータリーの理論と、そして情熱とを我々日本ロータリーのファウンダーたちは取り入れたのであります。そしてロータリー理論に忠実な立派なロータリーの考え方を我々に伝えてきたのであります。まず、それぞれのロータリアンの奉仕の心なんだよと、さんざん聞かされたものであります。

もう一つ本日のテーマとして、いろいろロータリーのプログラムがあるけれども、そのうち何がロータリーの目的なのか、また何がその手段なのかということをよく見極めることが必要なのではないかと、私が中島コーディネーターから与えられた副題が「ロータリーの目的は何か」ということで、これをしっかり捕まえて心の中にしっかり持っていないといけないと思います。これから来るべき世界、このロータリーをどういう方向で伝えていくのか。今ここに集まっていられるのは、現在のロータリーを背負っておられる方々であります。この方々が、現在の何を残し、何を引き継ぐべきかということとしっかりと考えなければならない時、重大な時であると思うのであります。そこでその答えをズバリ言えば「ロータリーの目的は何か。それはロータリーは、人作りである」と結論したい。それでは決議23の34にロータリーの人作りについて、どのようなことが書かれているかをご紹介します。と、思います。

まず、決議23の34の中で一番最初に出てまいりますのが、ロータリーとは何かという項目であります。これには「人が誰でも持つ利己的な欲求と、他人のために奉仕をしたいという感情の間に存在する矛盾を和らげるようにする、この人生哲学がロータリーなんだ」とこう述べてございます。これは、なかなか難しいことですが、素晴らしいことだと思います。その当時は、「世のため人のため」「慈善運動」といえば、駅前に立ってただ募金をする、そういうのが慈善運動というのだと考えておった。しかし、我々の仕事の中で自分の利益を考える。競争の激しい中ですから、競争相手が潰れりゃいいなという考えもどこかにちらつく。と、同時に何か世のため人のために役立つこともしたいという気持ちもある。この両方の考え方を一つ接近させていこうじゃないかと、こう考えたときには、これは実行できそうだと思うんです。この考え方から導き出されるものが「もっともよく奉仕するものは、もっともよく報いられる」という、テーマなのであって、これこそ我々職業人の実践の哲学であるというふうに書かれておるのであります。即ち、職業奉仕のキーワードになるのであります。

第二に書いてありますことは、ロータリークラブこそ一番大切なロータリアンの心を育てる場所である。クラブこそが、人生道場だと言われておりますが、まさにそのとおりであります。クラブこそがこのロータリーの奉仕の心を持つ人を育てる場なのであります。クラブこそが最も大切な源泉であります。

第三には、国際ロータリーというのは決して個々のロータリークラブに命令などするもんじゃないんだ、有益な助言を行うものなんだと書いてあります。あくまでも育成し、また拡大をし、情報交換をするという役目がロータリーなんだと。もし、ロータリーの組織というものをピラミッド型の三角として考えるならば、それはまさに逆三角形と考えた方がいいのであります。この逆三角形の一番上にある面にまずロータリアンがおります。横一列におります。その人達がどのように深くロータリーの哲学を身につけるかが最大の問題であります。

中島コーディネーターが顔を見て、そろそろ時間だという顔をしていらっしゃいますので、この辺で結論を出したいと思います。

ロータリーの目的は、まさに人作りであり、クラブに教育的雰囲気を持つことが必要なのであります。昔は、今のように情報を手に入れるのが大変でした。入ってもそれを和訳しなきゃならない。そういう苦心をしながら昔のガバナー達は、一生懸命に勉強してくれ、それを私達にわかりやすい言葉で言い表してくれたものであります。

今、情報過多の時代でありまして、得ようと思えばいくらでも情報が得られます。為にならない情報もたくさんあります。だから、これからは一人一人のロータリアンが、何が真実なのかを見極めながら情報を得なきゃならない時代になってくるんです。そうすると、クラブでのロータリアンの育て方が何よりも大切である。クラブの会員に対する教育を強化しなきゃならない。今のクラブには一般的に昔よりも教育的な雰囲気が足りない。常に温かい教育的雰囲気を持ち、新しい人達にロータリーの心を植え付ける、こういったクラブ作りをもう一度から始め直さなきゃならないときではないかと思っておる次第でございます。

この辺で一応一段落させていただきました。

ありがとうございました。

中島PG

実は秋山パストガバナーにお願いした私の題は、ロータリーにおける奉仕というのは、それが目的なのか、何かもう少し崇高な目的を達するための手段なのか、ということについてお話をしたいと言ったのでございますけれども、この私の問いかけは非常に厳しゅうございますから、皆さん方に誤解を招いてもいかんと思いましたので、あえて私の質問を伏せまして、秋山さんの優しいお言葉で、優しい心から出てくるお言葉でご披露願ったわけでございますが、要するにロータリーにおけます奉仕というのは、それ自身が目的ではなくて、やはり人を作るための手段であるというふうにおっしゃったと思うのであります。

これは、人作りをしていく場としてロータリーの例会が非常に大切な場である。しかし皆さん方、ご反省いただきますと、みなさん方のロータリークラブの例会がそういう場になってるか、ロータリーの奉仕の機会を皆さん方と話し合って交換し、奉仕したことによって得た喜びとか感動を分かち合うような場になっているか。これは大いに疑問が残るところだと思っております。皆さん方にも是非一つ皆さん方のクラブの例会のありようを反省していただきまして、改良の部分がありましたら、是非一つ皆さん方とお話し合いを願いたいと思うのでございます。

そういう風にロータリーには、いろんな考え方がございます。最近の国際ロータリーのありようを見ておきますと、そういったロータリーにおける奉仕は奉仕自身が目的であって、それ以外のものは無いというような印象を与えるようなことが多くございます。だんだん決議23の34の精神が薄れていっているのは明らかでございます。それだからこそ、この決議23の34を非常に大事にしております、日本の中で各ロータリアンが大いに議論し、

この決議23の34の精神というのを大切にしていきたいなという想いが強いわけでございます。

先ほど深川パストガバナーが、この職業奉仕のことを職業人の倫理運動というふうに申されました。最近とみにいろんな職業におきまして倫理上の問題が起こっております。そしてリストラの時代になりまして、都市銀行等々がロータリーからメンバーを引いていくような状態が、全国各地で見られるわけでありまして、他の業種におきまして、リストラの一環としてロータリーからメンバーを引いていくという場面が出ます。先ほどRIの会長代理さんからもご披露ございましたように、今年の6月末にが〜んと、日本のロータリーの会員も減ってしまったわけです。そうした中で私を感じますのは、そういう金融機関とか、他のロータリーから会員を引いていける企業の中でこそ、私たちがロータリーで大事にしております、ロータリーの精神とか、倫理のありようとかというものをより学習していただかないか企業が多いんじゃないか、何か選択を誤っておられるんじゃないかなという気がしてならないわけでありまして。今、RIの職業奉仕委員会の委員をしておられます渡辺パストガバナーに、みなさん方がおわかりにくいというふうにおっしゃいます職業奉仕につきまして、わかりやすくお話をいただきたいと思うわけでございます。

渡辺パストガバナー、よろしくお願ひ申し上げます。

渡辺PG ご紹介をいただきました、2690地区のパストガバナーの渡辺でございます。

ご案内のように、10月は職業奉仕月間でございます。10月号の「ロータリーの友」に職業奉仕につきまして、私の思いを二、三書かせていただきました。おそらく、皆様には、すでにお読みのことと思ひます。それから、丸山会長代理からご紹介がありましたように、この11月は財団月間でございます。私は、第3ゾーンと第4ゾーンのAを担当させていただいておりますRI財団地域コーディネーターでございます。私には、ご参会の皆様のお顔が神様に見えております。神々しくて眩しいのでちょっと大変かと思ひますけれども、そういったことも合わせてPRをさせていただき、与えられました時間お話をしたいと思ひます。

昨日の新居浜南ロータリークラブの歌の中に、第2番に「職業奉仕を第一に」と言うところで深い感動を覚えました。で、作詞をなさいました直野大会委員長に心から敬意を表しますとともに、これから与えられました職業奉仕ということについて、お話ししたいと思います。

「不易流行」、これは、俳聖松尾芭蕉の言葉でございます。ロータリーもそれに照らし合わせて、変わっていいものと変わってはならない、これこそロータリーだという、いやこれは変わらなければならない、私たちが生き延びるためには、ということがありますけれども、その中で二つのことを申し上げたい。

変わってはならないものの第1は、職業分類であり、2番目は、定期的な会合であります。この職業分類こそ職業奉仕の原点といひますか、職業

奉仕を考える中で最も大切なことです。職業分類の考え方も、いわゆるclassificationも、変わってまいりました。

先ほどから、パネリストであるパスト・ガバナーのお二人の論客からこの“Service”という言葉が「奉仕」ということになる、いろいろないきさつについてお話になりました。ここに「手続要覧」Aの1を持っておりますけれども、この「手続要覧」の中で邦訳、日本語で非常に難しい言葉の一つが“Service”という言葉でございます。ご存知のように日本語にならない外来語というのがたくさんございます。「ボランティア」がその一つです。あるいは、一旦、外国に行って日本に帰った言葉、例えば「社会」などもその一つです。

「手続要覧」に書いてあるServiceと言う言葉、これこそ非常に難しい。日本語で奉仕となっております。これがまたいろいろ論議になりますけれども、では、この職業奉仕、この奉仕の分類ということについて、私たちはどのようなことを考えたらいいでしょうか。つなぎのために決議23の34のことを引きますと、その第2項、2番目の第3項には、「各自が個人としてまた職業を持つ職業人として奉仕を實踐すること」と書いてありますから、そういう点からしますと私たち決議23の34というのは現在においても生きておるわけです。

では、この職業というのはいろんな意味におきまして、たくさんの訳がございます。英語でいいますと例えばcallingだとか、vocationとか、今申し上げる時間はございませんけれども、それぞれに意味があります。しかし、結論から申しますと、私たちの「手続要覧」を見ますと、vocational service、すなわち天職、神から与えられて、息吹を与えられた天職であると。このような理解をしませんとなかなか難しいのです。

あと時間がありましたら「四つのテスト」のことについても触れたいと思ひますけれども、奉仕だけやって理解すればいいということではありません。私の理解では四大奉仕という、RI会長代理様からも先般お話がありましたけれども、いわゆるクラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、あるいは国際奉仕があります。

この新居浜の街にもいろいろな通りがありましてですね、ちょうどコーディネーターの中島パストガバナーがご卒業になったコロンビア大学のありますニューヨークでは、南北これはアベニューと申します、東西をストリートと申します。四大奉仕のことを英語ではFour Avenues of Rotary Serviceと申します。そうしますと、ある道、これは職業奉仕、これはクラブ奉仕、これは社会奉仕、これは国際奉仕である。しかし、それにはストリートがありますから、それぞれ繋がっているわけです。

丸山会長代理様がエリア・コーディネーターをされております、会員増強とか、あるいは退会防止とかいうことと、職業のことについて考えてみますと、決して無縁ではないわけです。と申しますのは、国際奉仕もそうですし、社会奉仕もそうです。私たちのこの理解はそれぞれが繋がっていますし、またロータリーの中にはよくバランス、均衡のとれたメンバーシッ

プのいろんなことがあります。しかし、あるクラブにおいてはあれもこれもやってはいけない、いややらなくてはいけないということじゃなくて、何かきらりと光るものということがあります、やはりバランスがとれていることが非常に大切なことになってまいります。

では、この奉仕活動の中で今申し上げました銀行の支店長様、あるいはいろいろなことで引かれるということがあります。しかしそういった影響力のある人たちを私たちのクラブに入らせていただくか、今ここにいらっしゃる中島パストガバナーは泉大津の商工会議所の会頭でございます。そういった商工会議所の、私どものクラブにも商工会議所会頭の現職の方がいらっしゃいます。そういう方がロータリーに入ってなければ、是非入っていただいでください。そして私たちとともにロータリー活動をして、世のため人のために奉仕をしましょうということになります。今度は逆に、現在ロータリーに入っているロータリークラブのメンバーからロータリアンになっていただく。これは、どう申しましてもクラブの責任です。クラブはそういうことをする学校でございますから、そうしませんと会長代理様のご披露がありましたように、レイシーさんのように一度退会をされるわけです。レイシーさんは幸いなことにミル・パトソンさんという大佐が来て肩を叩いて、「ビルさんそう言わないで入りましょう」と、そういうことから始まったわけです。統計的なことを会長代理様の前で恐縮ですけども、私の理解では、今、全世界にロータリアンが120万人いらっしゃいます。一年間に16万人退会されるんですよ。日本が13万人ですから日本のロータリアンの数以上の人が退会をされて、それからまた入ってこられるわけです。退会をされるということの中で、やはり体のこと、事業のこともありますし、やはり職業的なこともありますけども、それは4割ぐらい。他はやはり寂しいということ、相手にしてもらえないという。こういうことが職業的な繋がりも含めて、大変大切になってまいります。

今、全ロータリー120万人のうち40%は入会して2年未満です。そうしますと、教育ということが大変大切になってきます。それがクラブサービスにつながりますし、とりもなおさず職業奉仕につながります。会員、ロータリアンが増えてまいりますと、社会奉仕も国際奉仕もいろんな形でできてきます。私の気にしておりますロータリー財団も栄えてきます。そういうふうなことになりますので、この奉仕活動、四大奉仕部門というのはそれぞれに繋がっているというご理解を賜れば非常に有り難いと、これが私の発想のベースでございます。

今ひとつ、では、職業奉仕の捉え方はどうしたらいいのでしょうか。会長代理様がおっしゃいましたように、本当に職業を通じて他の人を幸せにする、もうこれにつきると思います。私、思いますのに、人間として、ロータリアンとしてあなたは他の人が期待する以上の事ができるのです。これが一つの思いだろうと思います。だからそこに心を入れて私たちの活動、同じ事をしましてもそこに思いが加わりますと、素晴らしい奉仕活動ができます。

ロータリークラブに入っている同業の人たちとの交わりのみならず、それが一つの炭火、それが光になって、どんどん地域社会に広がっていくのです。前にいらっしゃいます森三郎パストガバナーの炭火論に、私、感銘を受けているのでございますが、そういった意味で私たちが核となりましょうと。だから、白鳥蘆花にるように、地域社会に広がっていく、それを職業を通じて拓がる、これが、職業奉仕そのものであります。職業を大切にしていくということは、決してディスカウントしたりすることではございません。これは「四つのテスト」とも大いに関係があります。会社を潰しては何もならないわけですから、どうすれば会社が儲かるかということ、佐々木ガバナーの肝いりで、明日大家が来てお話になることを、私たちは刮目して聞きたいと思うのですが、これも一つの、職業奉仕の思いではないかと思えます。

ただ、もう一度、職業分類が何故大事かという、やっぱり一任一様っていう事があります。1920年当時、できました時に新聞は人数に制限がなかった、これが第一ですね。しかしながら1964年位に宗教が入って参ります。その次に1997年には外交官が入ってきます。これも一つのロータリーの歴史を踏んでおります。また、途中で新聞というのが報道機関とメディアになってきます。でございますので、私たちのロータリーが生き延びるために、職業分類は、ある意味では開放していく。職業分類を開放して、そしてまたレギュラーミーティングも私たちがそれを守りながら、ロータリーがロータリーである所以のことをやっていく。こういうふうな事が、大切になってくるのではないかと思えます。

後4分位だと思いますから残り、4という数字の「四つのテスト」について触れてみたいと思います。ロータリーの職業奉仕委員としてはボランティアの事に触れないといけないんですけど、また時間がありましたらということ。

皆様方ご存知のようにテイラーさんがこの「四つのテスト」を考案しました。こういった不況の時代、ロータリアンの会社が倒産をしなかった、そして救済ができたという。これがすべて、日常生活に「四つのテスト」を適用したからだと言われております。「真実かどうか」「みんなに公平か」「好意と友情を深めるか」「みんなのためになるかどうか」。これは、東京ロータリークラブの訳が採用されておるわけですが、やはり言語を越えた理解っていうのを私たちはしなければならぬと、このように思えます。

例えば、「真実かどうか」、何を基準にして真実かどうか。彼らは、やっぱりあるバックグラウンドがあります。あの1ドル紙幣の裏。今日、このホテルでドル紙幣を見ようと思ったんですが、なかったわけですが。“In God we trust”と、こう書いてあります。バックラウンドにある神に誓って私はこれを信ずるかどうか。あるいは、「みんなのためになるかどうか」、これは悪平等ではないのです。お互いにいろいろな事をがんばってやっていくことがやっぱり報われるという事もあるわけです。最後の、「みんなのためになるかどうか」ということでは、簡単に申しますと、正当な利潤

を上げて、会社を発展させ、企業を発展させていただきたい。これがひとつの職業奉仕の原点です。それを社会に還元して、また栄えていくということが大切です。言葉足りない事もございましたけれども、時間の関係もでございますので、これで終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

中島PG 渡辺バスターガバナーありがとうございました。渡辺バスターガバナーのお話の中に出了、2570地区の寄居の森バスターガバナーは非常にユニークな表現を使いながら、職業奉仕を上手に皆様方におわかりいただけるようにお話ができる素晴らしい方でございます。恐れ入りますが、今、渡辺さんがお話しされた事に関しましてのご感想、並びに、あなたのお持ちの持論をご披露いただいても結構でございますけど、あまり長くなりませんように、上手にお話しいただきたいと思ひます。

森PG 恐れ入ります。先ほど、私が雑誌委員長会議の席上で申し上げた事の繰り返しになることが多いと存じますが、今、中島コーディネーターのご指名によりまして申し上げます。

私は、He profits most who serves bestという言葉は何とか日常語に移せないものかなという事で考えておりました、たまたま、町の公民館で、町の子供たちから募集いたしました、ボランティアの標語がございまして、その中に特選というわけではありませんでしたけれども、私の目に入ったのが「助け合う心で、自分も育つボランティア」というのがありました。私は何々を育て自分も育つという言葉に非常に興味を覚えまして、これをロータリーの場合にあてはめて、例えば、「クラブを育て自分が育つ」とあるいは、「仕事を育て自分が育つ」と。こういう事、つまり人は何かを育てるという事なしに、自分が成長するという事はあり得ないのではないかと。もしも、自分が成長したいと思うのならたとえ、地域社会であってもよろしい、あるいは、青少年であってもよろしい、あるいは、動物や植物があってもよろしいが、何かを育てるという事の反作用として自分が育つというふうに、考える事が適當ではないかと思ひまして、「人作り、ロータリー」という、ロータリーの第一の命題に対応するものとして、人作りという事を目指すのなら、クラブを育て、あるいは自分の仕事を育て、自分の住んでいる町を育て…というふうに、私は「育てる事において育つ」という関係を、これから大切に考えていきたいと思ひしております。ただ今の中島さんの問いに答えた事になるかどうか分かりませんが、先ほどの雑誌委員長会議で、私はその事をご披露いたしておきました。

中島PG 森バスターガバナーありがとうございました。

私などはロータリーの事を話しますと、この直接的で非常に四角張った話になるんでございますけども、森さんにかかりますと非常に丸く柔らかく、お伝え願えて、しかもわかりやすいお話をなさいます。本当にありがとうございました。

先ほど私は、ロータリーにおきまして、奉仕というのは、それが目的ではなくて、もっと崇高な目的を達するための手段であるとう表現をいたし

ました。人作りの事を申したわけでございますけれども、この世の中が住みよくなるために、思いやりを発揮していろんな事をやる事を私ども、奉仕と呼んでおります。もちろん奉仕は、尊いのでございますが、そこには人作りができるという背景がないといけないと思うのであります。従いまして、その奉仕活動は喜びとか感動を生まないという目的を達せられない、というふうに思ひます。

私は今、国際ポリオ・プラス委員会の委員をいたしておきまして、ポリオを世界から撲滅する運動をやっております。もうずいぶん長い運動でございまして、1985年から13年目になるわけであります。ロータリーでは、単年度で奉仕活動が終われるような奉仕プロジェクトを選びなさいというふうに指導しておりますし、あまり長く繰り返しますと、マンネリになりまして感動を呼ばないわけであります。13年も同じプロジェクトを掲げてたら全然感動を呼ばないじゃないかという事もございます。しかしながら言い訳をいたしますと、このポリオを撲滅する運動っていうのは私どもの百周年記念事業でございまして。皆さん方のクラブでも五年毎に周年記念をやらせて、プロジェクトをたてられるわけでございます。私たちの大きな120万人のロータリーの百周年事業でございましてから、ぜひ一つ、この掲げてしまったプロジェクト、完遂したいと思ひのであります。

先ほど、渡辺バスターガバナーが触れられましたが、もう多くの会員が、そういうプロジェクトが掲げられた後で入ってこられた。ポリオのために寄付なさった経験がないとか、ポリオって一体何だっという方が多いわけでございます。是非一つ、この崇高な私どもの百周年記念事業にご参加をいただきたいと思ひます。あともう一息でございます。大事なところへさしかかっております。アジアのインドやパキスタン、バングラデッシュから、忌まわしいポリオという病気がなくなりますように、内戦で困っておりますアフリカからポリオがなくなりますように、是非一つ、ご後援をお願いしたいと思ひのであります。

先ほどから、この地区大会でいろいろお話を伺っておりますと、ポリオという言葉がなかなか出てまいりません。是非一つ2670地区でもポリオ撲滅運動に積極的なご後援を賜りたいと思ひ申し上げたいと思ひのであります。ちょっとPRになりましたが、よろしくお祈り申し上げます。

あと残された時間は15分余りでございまして。今までにお話いただきました御三人の方に補足の説明をしていただきたいと思ひのであります。皆さん方の中で何か今までに出ました話に関しまして、ご質問なり、ご意見ある方ございませぬでしょうか。

ないようでございますので、御三人におしゃべりいただきますが、先程私ちょっと触れました深川バスターガバナーは、この1930年代に、経済的に不況でありましたアメリカの中でロータリアンが活躍された情景を上手にご披露なさいます。これは是非私聞いていただきたいと思ひのであります。恐れ入りますが先程1923年で終わりましたので、ちょっと飛ばして1930年代の、あの一大恐慌でがんばりました、アメリカのロータリアンにつ

きましてお話を披露いただきしたいと思います。

深川PG 先ほどは、時間に追われまして早口になって申し訳ございませんでした。お許しください。

1930年ですが、アメリカのロータリーが、大体1930年から1945年、戦争が終わるまでの間、アメリカ社会から絶大な尊敬と信頼の拍手を浴びた事があります。それは何故かといいますと、単に寄付行為をしたりボランティアをしたとか、そんな問題ではないのであります。それは、ロータリアンが、まさに職業奉仕を実践したことであります。自分だけがロータリアンになったためにロータリアンになれなかった同業者が、どんどん倒産していった中で、ロータリアンは1929年から始まる恐慌に1人も倒産していないのであります。では、自分たちだけが倒産しなくて隆々と栄えていいのか。もしそうであれば、エゴイズムの原始ロータリーと変わらないわけでありまして。したがって、自分が栄えたら、自分が入ったためにロータリアンになれなかった同業者のために、なぜ自分が成功したのかという、そのノウハウを公開して行って、共存共栄で、皆で栄えていかなければならない。これがロータリーの職業奉仕の大きな柱なのであります。

一つ例を申し上げます。先ほど、渡辺パストガバナーが、「四つのテスト」を引用されました。あの「四つのテスト」というのは、1954年に国際ロータリーの会長になりましたハーバート・テイラーが、1932年に倒産しましたアルミ食器会社を再建するために考案したものであります。そして、10年にして一流企業に育て上げたのであります。それを見ておりましたシカゴの商工会議所の連中が、ハーバート・テイラーに「ハーブ、お前は素晴らしい事をやった。何か秘密があるだろう。手の内を明かせよ」と言ったのであります。そこでハーバート・テイラーが、「実は『四つのテスト』を考案してやったんだ」。そうすると商工会議所の連中が、「それは立派な事だ、それはお前が成功した事によって完全に立証されている。そのノウハウを皆に紹介してくれ」というので、商工会議所傘下の事業家達にそれを公表したのであります。

ところが、それを見ておりましたシカゴのロータリアン達が、「なんだハーブの野郎、ロータリーで何もしないで、商工会議所であんないい事やってる。それをロータリーに譲らないか」というので、彼が1954年に国際ロータリーの会長になった時に四つのテストの著作権をロータリーに譲ったということになるわけでありまして。

要するに、倫理を提唱し、そしてノウハウを公開していく、そして地域社会の人たち、職業社会の人たち、世界社会の人たち、皆共存共栄で生きていこうという形で、がんばったがためにロータリーは非常な絶賛を浴びたわけでありまして。

チェスレー・ペリーという1910年から1942年まで32年間国際ロータリー事務総長を務め上げました、偉大な組織管理者が言うております。「ロータリーができた時の事を考えてみよう。アメリカ経済社会に同業組合は一

つもなかった。これは全てロータリーが作っていった。それから、商工会議所はあるにはあった。しかし、全ての商工会議所はやる気をなくしていた。商工会議所のない所に商工会議所を作り、そしてやる気をなくしていた商工会議所に倫理を提唱する団体として蘇らせていったのは、ロータリーがアメリカ経済社会に残した最大の功績だ。ロータリーの功績歴然としたものがある」と言うております。

要するに、ロータリーが奉仕という事に目覚めてから今日にいたるまで、一貫してロータリーの根底に流れる思想は、「人類の共存共栄」なのであります。ロータリーがポリオ・プラスをやっていることも人類の共存共栄、今日的な流行語で言えば、共生共に生きるであります。人と人の共生であります。人と自然との共生もロータリーは宣言しております。

1923年が実践原理の確立だと申し上げました。その実践原理が完全に完成するのが1962年、インドのカルカッタロータリークラブから出ましたニティッシュラハリーという、国際ロータリーの会長、彼が「世界中の何処かの片隅に、一人でも不幸な人がいる限り我々ロータリアンは永久に幸せになる事ができない。」「心の中に火を燃やそう」という有名なターゲットを打ち上げました。この世界社会奉仕の自覚によってロータリーの実践原理が完成するわけでありまして。これはやがて1966年、リチャード・エバンス会長の時に、WCS、世界社会奉仕の実践として実っていくわけでありまして。したがって、ロータリーの奉仕については、いろんな考え方がある、それはそれでよろしいのであります。一つどうしても忘れてはならないことは、同業者との共存共栄、地域社会の人たちの共生、国際社会、世界社会の人たちとの共生、共存共栄。これがロータリーが一貫して持っておった思想である、という事だけは申し上げておきたいと思っております。

中島PG どうもありがとうございました。

秋山パストガバナーから先ほど、ロータリーの奉仕の目的は人作りであるというふうに教えていただきました。そして人作りの場合はロータリークラブでなくちゃいけない。例会が大切な場だったと思うのであります。今2750地区とか2670地区は知りませんが、私どもの地区では各例会でロータリアンが、中途退席すごくするんです。お食事が終わりましたら退席する人が非常に多い。惨澹たる有り様であります。そういう今、説いていただきました例会のありようとは、どういうふうにロータリークラブの例会を改良していったらいいか、どんな手段があるのか、どうあるべきなのか、もう少し具体的にお話をいただければありがたいと思うのであります。

秋山PG ヒュー・アーチャーという元RI会長がおられまして、ちょうど私ども同期の連中が中島コーディネーターに選ばれている国際協議会の合間の席でありましたが、その方はなかなかユーモアのある事をおっしゃいまして、例えば「彼はロータリーに入った、しかしロータリーはまだ彼の中に入っていないよ」という言い方をされました。また、ロータリークラブという所はそうしかつめらしい堅苦しい場所になってはいけない。常日頃のプログラムや会員同志の会話の中に構えて教育をするより、常に教育的雰

困気であり、教育的な暖かい場であって、お互いに声をかけあい、話をしたり聞いたりする例会であって欲しいと言われました。まさにそのとおりと存じます。

それからもう一つは、クラブの尊厳という事をよく知ってもらうことであります。同じヒュー・アーチャーさんの話ですけれども、当時、ロシア、旧ソ連の解放が行われまして、そこにロータリーを作る事になりました。ヒュー・アーチャーさんはその時の会長として、大変苦心をなさって、確かフィンランドがスポンサーになって、最初の旧ソ連領にクラブを作ったのでありますが、いろいろな準備が終わり、いよいよ最後に彼は政府と面談をした。そして、これだけは絶対に守ってもらわなければならない絶対条件というものを四つ提出しました。ロータリークラブの自由と独立自尊というものを政府はしっかり守れるかということでもあります。つまりロータリーの例会は、神聖なる場であり、決して他の介入を許さない。もちろん諜報などもっての外である。ロータリーの内部で話したことが、政府の気に入らないことだったとか言って干渉されたら、ロータリーは成り立ちません。クラブに何ら政府は干渉しないこと。会員を選ぶ時にも政府は干渉しない、その次は、ロータリーの役員選挙に干渉しないこと、そして会員の増強、並びにその地域における拡大の自由を認めること、最後にR Iの分担金はちゃんと送金できるようにすること、国でストップされちゃ困る。この四つを最後の絶対条件として出したと。これがOKになって初めてクラブの設立を決定したのだという話をされました。

なるほど、我々のクラブっていうものはそのように守られ、そして独立し自主的な権威のある会合なのだということを非常に感慨深く聞きました。しかしその割に、ロータリークラブにそれだけの自覚があるかどうか。例えば、規定審議会で地区から代議員を出して、提案されたものの採決をやってくるのでありますけれども、その代議員が行く前に、地区の色々な意向を聞いておきたいということで、各クラブの意向などもアンケートするのですが、そういう時には積極的に参加してほしい。そうすると、会員がみんな、関心を持つのであります。規定審議会で決めたことは、もう一度その採決されないものを各クラブに送り、もし反対のものがあれば各クラブの理事会において反対を決議し、それに会長と幹事が署名したものをR I事務局宛宛に提出する。それが全体の一割以上になった場合には、その件に関して全クラブの郵便投票となり、多数決で決まることになります。

それぐらいロータリークラブというものの権威は、守られているのであります。そういう機会を利用して、どうか皆さん、各クラブで自主権を行使できるよう関心を持っていただきたい。それがクラブの尊厳をみんなに知ってもらう事になり、そして自分達の意見というものがR Iに通じるんだという自覚ができてくる。こうした事を一つ一つやるべきではないかと思っております。そういうことに限らず、地区から出された問題にしても、ぜひクラブで真剣に討議をしていただきたい。そして、賛否をはっきりと意志表示していただきたいと思っております。以上でございます。

中島 P G ありがとうございます。

今、お話に出ましたヒュー・アーチャーという会長さんは私も最も尊敬する会長さんでございます。“エンジョイ ロータリー”、ロータリーを楽しもうというR Iテーマを掲げられたわけでございますが、ご本人に、「どのようにしてロータリーをエンジョイしたらいいんですか」と聞きました。「それは君、クラブの会員同士でお互いの尊厳を高め合う努力をし、高まった事を喜び合う、そういうエンジョイのしかただよ」とおっしゃいました。今、秋山パストガバナーがおっしゃいましたように、皆さんのクラブの尊厳も高めよう、そして、あなたの住む町の品格も上げよう。その自分の住む町の品格が上がった事をお互いが楽しむ。そういうふうな事をしよう。できれば、この地球の品位も高める努力をしよう。そういうふうにしてエンジョイしようじゃないかとおっしゃたわけでありまして。いまだに私はそのお言葉が頭にこびりついております。非常に感動したのを覚えております。

今、ちょうど時間になりましたが、後5分程延長をいただきまして、渡辺パストガバナーから、先ほどちょっとお話しました、ボランティアにつきまして、お話を伺ってこのパネルディスカッションを閉じたいと思いません。

渡辺パストガバナーお願いします。

渡辺 P G 私どものところに渡辺和子さんという渡辺正太郎さんの娘さんがいます。先ほど、深川先生からお話がありました、カルカッタのマザー・テレサという人と対談いたしました。渡辺和子さんはこう言ったのです。「私どもの学生で、カルカッタに行きたい、ボランティア活動をしたいという人がいるのですが、どうしましょうか」と。テレサさんはこう言ったのです。「あなたの町のカルカッタでボランティアをしてください」と。そうなんです。だから、「皆様方の中でボランティアをしましょう。そして、肩を、手を出して、手をさしのべましょう」という。

サブR I元会長が地区大会でこういうふうな話をされました。彼が少年院に行くと、肩に手をおいて、「坊やどうしてここに居るの」彼はこう言ったんです。「ぼくが娑婆にいるときに、誰もおじさんのように私の肩に手をかけてくれる人がいなかった」。これは職業に関係なくどなたでも、ロータリアンであればできる仕事です。肩に手を置くだけで、孤独であるという事と、他の人の事に何かする、これは自分自身が生きるためだと言われておりますが、それも奉仕の一つではないかと思っております。本当に最悪の病というのは、決して多くの病ではございません。これは孤独で、精神的な貧困です。しかしこれは、お金では解決できない、やはり人の心の触れ合いがないかぎり、できないわけです。ロータリーはここを大変大切に、見えるものよりも見えないものを大切にしていくと、これこそボランティアの原点であります。

今一つ、この年リーダーをさせていただきました“Follow Your Rotary Dream”のYourというのは、単数か複数かという質問がありました。ホッ

トラインで聞きました。mostly single なんですよ。ここにいらっしゃる皆様方、お一人お一人の夢がそれをロータリーの夢で実現していこうと。ロータリーの創始者であるポール・ハリスさん、また、ロータリー財団を提案したアーチ・クラフさん、この方々は、すばらしい「夢みる人」、「Dreamer」ではないかと思うのです。

そこで、私は、DREAMERの頭文字をとって acronym を考えました。これをもって、私の結びとさせていただきます。まず、DreamのDからはじめます。A dreamer is dedicated, 夢みる人は、献身をされる人ではないかと思えます。A dreamer reaches out, その人は手を差し延べる人であり、A dreamer is enthusiastic, その人は勇気をもって大いに鼓舞されるんじゃないかと。そして、A dreamer is ambitious, その人は大望、大きな望みを持っているのではないかと。そして、A dreamer is motivated, その人は行動に動機づけられるのではないかと。さっきも申しました、A dreamer enjoys life, 本当に Rotary life を enjoy する。決して傍観者ではなく、ご自分が part icipate、すなわち、参加し敢行した後に楽しむ。これがすなわち “Enjoy, Rotary” です。皆様方が、船長としてあるいは機関長としていろんな形で船に乗り込んで、そのことをする。これが enjoy です。その後楽しむ。これがロータリーで、そして結論は、“A dreamer is a Rotarian” 夢みる人こそロータリアンであります。ご静聴ありがとうございました。

中島PG 1時間半に渡りまして、一人の退席者もなく、本当に皆さん一生懸命お聞きくださいました。奉仕につきまして、いろんな角度からこの3人のパネリストにお話願ったわけございまして、かなり学習していただけたと思います。大切な事は、これをクラブにお持ちかえりいただきまして、ご披露していただくと共に、大いに議論していただきたい、ロータリーは1923年までの間、すごい議論がございまして、それが非常にエネルギーを産んだわけでございます。今、ロータリーは非常に危険なところにさしかかっていると思います。これを再生して素晴らしいものにするために、是非議論が必要だと思います。今日お聞きになったので終わり、ではなくて、是非、クラブの皆さん方とご議論なさって、そしてクラブの例会を有意義なものにしていただけたら、私たちにとって非常に幸せであります。